

「祝福の内容」

エペソ人への手紙 1 : 3 - 1 4

November.21.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 - 1 4

Preface

イエス・キリストを信じてキリスト者となった私たちが、「あなたはイエス様を信じてどんな祝福を受けましたか？」と質問を受けた時、どんな祝福を受けたのかをはっきり分かって、言葉で説明できるでしょうか？

答えることの出来る人は意外に少ないかもしれません。

これまでエペソ書の御言葉をこと細かく見てきましたが、実のところ、先程読みましたエペソ書 1 : 3 - 1 4 の御言葉は、切れることのない一つの文章となっています。

「神がほめたたえられますように」という言葉から始まって、「神の栄光がほめたたえられるためです」という言葉で締めながら、「私たちに与えられた祝福ゆえに、私たちが出来ることは神をほめたたえることだけです」と、使徒パウロがその感動を抑えることが出来ずに、切れ目なく一気に語っていきます。

このパウロの言葉には、感激が溢れています。

牢獄にいるにもかかわらず、与えられた祝福のことを思うと感激せずにはいられません。

このエペソ書 1 : 3 - 1 4 の御言葉を読むと眠くなってしまう、「ああ、やっぱり聖書は睡眠薬だと聞いたけど、やっぱりそうだね」と思ってしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、神様がキリストにあってお与えくださった祝福がどれだけすごいものなのか実感がなければ、まあそうかもしれません。

でもパウロは、牢獄に閉じ込められているにもかかわらず、キリストにあって与えられた祝福のことを思うと、そんな状況を物ともしない程の感激があふれてきました。

ここでパウロが言及しているキリスト者に与えられた祝福とは、神の子にしようとキリストにあって選ばれたこと、キリストの十字架によって罪赦されたこと、そして聖霊を与えられたことの3つです。

パウロは、「この祝福ゆえに、感謝と賛美しか出てきません」と、「この祝福ゆえに、私の人生に不十分なものなんか無く、足りないものなんかなんかありません」と告白します。

また、このキリスト者に与えられた3つの祝福のことを、ただの祝福とは言い

ません。

天上にあるすべての霊的祝福と言います。

選ばれたこと、罪赦されたこと、聖霊を与えられたことは、人が神より受けることの出来るこの上ない最上の祝福であると告白します。

Part One

まず一つ目の祝福、4節にあります。神の子とするために、世界の基が置かれる前からキリストにあって、私たちは選ばれました。

私たちのこの世界は、ある意味、選ばれることのために戦っています。

選ばれないから不安になり、選ばれないから不満が出て、選ばれないから恐れます。

人に選ばれ、組織に選ばれ、定めた規定に選ばれ、選ばれることをもって、私たちの満たされることのない渴望と不安と恐れを満たそうとしますが、選ばれることによる満足はいつの間にか消え去り、また次の選びを探し求めて戦います。

私自身、この選ばれるということを目標に生きるよう教えられ、選ばれるために努力し、選ばれるために時間をかけ、選ばれるために犠牲を払わないといけないと思い、選ばれた時には優越感に浸り、選ばれなかった時には劣等感と他者批判をして自分を守ろうとしながら生きてきた気がします。

今思いますと、選ばれることを目標に自覚しながら生活し始めたのは、小学校3年生ぐらいからだと思います。

私にとっての最初の選びとの戦いは、東京にある私立の中学校に選ばれるために必要なことを教えてくれる塾に選ばれるために、電車に乗って隣の塾に通い始めた時です。

私立の中学校に入るための塾に入るための塾に通い始めたのが、小学3年生の時でした。

その後も、そろばんや習字や剣道や水泳の昇級試験で選ばれるために、友達に選ばれるために、先生に選ばれるために、学校に選ばれるために、好きな人に選ばれるために、試合の勝利に選ばれるために、アルバイトや就職先に選ばれるために、選ばれなきゃいけないという渴望と恐れを満たすために戦い、また一過性の優越感なのに、その選ばれたという優越感がずっと続くかのように思い、戦わされていたような気がします。

もちろん、これらの経験すべてがまずかったのではなく、神様が益としてくださっておりますが、そこに救いはありませんでした。

この選ばれたいという欲求は、元を辿れば、神との関係が断絶しているところから生じています。

そして、その欲求が満たされる唯一の道が、イエス・キリストにあって選ばれ、

神の子とされることによる神との関係回復です。

これしか、選ばれなきゃという欲求、恐れ、底なし沼から救い出される方法はありません。

人や組織や規定は、私たちを拒絶し振るい落としながら選ぶということですが、神様はキリストにあつて誰をも拒絶しません。

皆が、神の選びに呼応することを願い、今か今かと、神様は待っていてくださいます。

この礼拝の場にいる私たち一人一人は、皆、神の選びの内にいます。神が選んでくださったから、みんなここにいます。

ヨハネの福音書（6：44）で、イエス様が、「父なる神が引き寄せてくださらなければ、誰もわたしのもと来ることは出来ません」と仰いましたが、私たちが意識出来ようが、出来ていまいが、私たちは、父なる神様の選びの内にキリストへと引き寄せられて、今ここにいます。

じゃあ、神様は一体全体私たちが何者ゆえに、何の資格があつて、何の条件が整っていて選んでくださったのか？

何を基準に神が選ばれたのかについて、言っている箇所があります。

コリント人への手紙第一 1：27－29（パウロ）

神の選びには基準がありません。

あえて基準を言うならば、愚かな者、弱い者、取るに足りない者、見下されている者、無に等しい者です。

こんな安心できる、脱力感いっぱいの幸いな選びがありますか？

誠実で、敬虔で、能力があつて、経験豊かで、知識豊富でと言われたら困りますが、弱くて、愚かで、取るに足りなくて、見下されていて、無に等しい者なんという基準からはじかれる人は誰もいません。

期待値が高いとか、将来爆上がりするとか、投じたものに対するリターン、利益、もうけが望まれるからではなく、ただただ恵みによって神に選ばれました。

この恵みの選びを経験しますと、人を見る目が変わります。

何よりも自分自身を見る目が変わります。

それまで抱いていた劣等感が薄れていき、消えていきます。

だからと言って、誇ることもありません。

だって、弱い、取るに足りない、無に等しい者なのに選ばれたからです。

感謝しか湧いてきません。

ただただ、ひたすらに感謝しか出て来ず、感謝しか告白できず、感謝しか献げられません。

Part Two

二つ目の祝福は、罪の赦しです。

イエス・キリストにあって選ばれ、神の子とされた者たちに与えられた祝福が、罪の赦しです。

イエス・キリストの十字架の血による贖い、罪の赦し、これこそ、祝福の中の祝福です。

アメリカの第39大統領ジミー・カーター大統領夫妻は、今もご健在で、カーター元大統領96歳、夫人のロザリンさん93歳で、今年結婚75周年を迎え、アメリカ歴代大統領の中で、最も長い結婚生活をされているご夫妻だそうです。

そんな仲睦まじいおしどり夫婦で有名なお二人が、ハーバード大学に特別講演で招かれて行った時、一人の学生からこんな質問を受けました。

「夫婦円満の秘訣は何ですか？」

その質問にカーター大統領がこう答えました。

「30%の愛と、70%の赦し合いです。」

するとすぐに、ロザリン夫人が立ち上がって、「嫌々違います。10%の愛と、90%の赦し合いです。」

それを聞いた聴衆みんなが笑い、拍手喝采だったそうです。

すごい言葉ですね。

（お二人はクリスチャンで、夜寝る前に、必ず二人で一緒に聖書を読み、和解して寝るんだそうです。）

夫婦関係を維持するのは、愛ではなく、赦しです。

すべての人間関係に通じることかもしれません。

愛とは赦すことでもありますし、赦すことこそ、関係を維持し回復するための鍵です。

ましてや、神様と私たちとの関係はなおさらです。

神様と私たちの関係は、赦しの関係です。

神様がキリストの十字架によって私たちの罪をお赦しになったから、神との関係を回復し、幸いな内にその関係を維持することが出来ています。

敬虔さの足りない私なんかは、「私が神様を赦した」と悪態をつくことがありますが、冷静になって振り返ってみますと、100%（99.99%ではなく）

神様が先に赦してくださって成り立っている神との関係です。

「なんで黙って、じっとしているんですか！」と、悪態をつく祈りを献げますが、しばらくしますと、その静かに私の悪態に耳を傾けながら、じっと聞いてくださるその時間が、それでも赦してくださっている神様の赦しの愛の時間だったということに気付かされ、頭を抱えながら、「ああ、ごめんなさい。すみませんでした。感謝いたします」と、必ずなります。

私たち人は皆、荷を負って生きています。

病という荷、お金という荷、失敗という荷、心痛苦痛という荷、家族という荷、色々な重荷がありますが、その中で最も重い荷は、罪の荷です。

罪のその重荷が、人を悲惨にします。

だからこそ、私たちが受けた祝福の中で最も大きいのは、イエス様を信じたゆえに罪赦されたことです。

罪赦されたがために、死ぬことさえも幸いになります。

ヨハネの黙示録 14：13（パワポ）

死ぬことが祝福になります。

死んでも祝福だと、幸いだと言います。

私たちは「死なんて縁起でもない」と、4という数字を嫌って、例えばエレベーターの4階を F と記したりするところもありますが、キリストにあって死ぬる者は、死んでも幸いです。

むしろ、キリストにあって死んだ先にある永遠こそ、まことの命です。

お金も、成功も、名誉も、死を前にしては何の役にも立ちません。

沙漠で彷徨い、喉がカラカラに乾いて今にも死にそうな人が、革袋を見つけ、最後の力を振り絞ってその革袋のところに行って革袋を開いて見たら、金銀宝石財宝がたんまりと入っていました。

しかし、水が無くて、今にも死にそうな死を前にしているその人には何の役にも立ちません。

だから、いのちの泉であられるイエス様は「だれでも渴いている者はみな、わたしのもとの来て、わたしの与える水を飲みなさい」とおっしゃるわけです。

死を前にして、また死ぬ時、その死を幸いにするのは、キリストにある罪の赦しを受けることです。

キリストにある罪の赦しこそ、天の御国に入る資格を得たということです。

イエス様を信じて受けた最も大きな祝福こそ、死さえも幸いに変える、罪の赦しです。

Part Three

3つ目の祝福は、聖霊なる神様が私たちの内に来てくださった、お住まいになって下さったということです。

イエス・キリストを信じる者となりますと、とてつもない変化が私たちの内で起こりますが、その変化を起こす方こそ、聖霊なる神様です。

エペソ 1：13、14節を見ますと、聖霊なる神様が私たちの内に来られた理由について述べていますが、その理由とは「証印を押すため」、またその押した証印によって「保証するため」です。

何のための証印で、何を保証するのか？

私たちが神に選ばれ神の子であるという祝福とイエス様によって死さえも幸いに変える罪の赦しを受けているという祝福を、確証するための証印であり、その保証として聖霊なる神様が私たちの内に来られました。

要するに、神の選びと罪の赦しが事実であるという確信与え、私たちに事あるごとに教え、伝え、説得し、語りかけ、認知し、信じられるようにするために聖霊なる神様は、私たちの内に来てくださいました。

私たちの持つ疑いを晴らし続けてくださるためですね。

天の御国に行くまで、または、イエス様が再臨されるその時まで、私たちの疑いを晴らし続けてくださいます。

聖霊が私のうちに来てくださいますと、世界が変わります。

目の前に広がっているのは、それまでの世界と何ら変わらない世界ですが、世界を見る目が変わります。

どん詰まりの人生を生きるのではなく、永遠に続く永遠のいのちを生きることが感謝で仕方なくなります。

たとえ、手かせ足かせに繋がれていたとしても、そんなの大したことではないように思えてしまいます。

物理的な、または身体的な束縛があったとしても、霊的自由が与えられていることに喜びが沸き上がってきます。

Part Four

私たちは、とんでもない祝福を受けました。

神様がご自分の子とするために選び、御子イエス様を十字架に架けることをもって私たちの罪を赦し、聖霊なる神様が私たちの内に来てくださった。

この祝福が本当に分かり実感できるならば、この世の中、恐れるに値するもの、心配に値するもの、なにもありません。

そしてここでもっと驚くべきことは、このものすごい祝福を受けるにあたって、私たちがしたことが何もないということです。

私たちがこの祝福を頂くために先に求め、祈ったわけでもなく、祝福を受けるにあたってそれらしい権利や資格を得るために、清く正しく生きたわけでもありません。

パウロが何度も告白するように、ただイエス・キリストにあって、ただただイエス・キリストにあって、このすべての祝福が私たちに及びました。

イエス・キリストにあって与えられた恵みでしかありません。

私たちの力、私たちの知識、私たちの行い、何の関係もありません。

だから、誇ることも出来ません。

そこにあるのは、ただただ感謝のみです。 感謝しかありません。

しかもこの祝福は、誰かがたくさん受けて、例えば講壇に立っている私が皆さんよりもたくさん受けて、皆さんは少し受けているなんていうものではなく、みんな等しく、同じように、全くもって不足なく完全に受けているのが、この神がお与えくださったすべての霊的祝福です。

これをもって、私たちは、大切なものすべてを受けました。

よって、私たちにはもうこれ以上、不足はありません。

世の物差し、世の尺度、世の基準で見ますと、神様は公平でないように見えます。

実際、ここにいる私たち全員、一見しますと全然違います。

世の尺度で、人間の作り出した物差しで見ますと、みんな違います。

もっと持っているように見えますし、持っていないようにも見えます。

そして結局、神様が不公平に見えますし、不公平に思えてしまいます。

しかし今、事実として語られているのが、本当に大切な唯一の祝福は、例外なく、みんな公平に与えられ、受けたということです。

本当に大切な祝福は、例外なく、みんな公平に与えられました。

この世で長生きしても、高々100年です。

しかも、その100年のほとんどは、労苦とわざわいです。

でも、天にあるすべての霊的祝福は永遠です。
そして、その永遠の内にあるのは、楽しみと喜びだけです。
労苦とわざわいによって流した涙は、ことごとくぬぐい取られ、あるのは楽しみと喜びだけです。

神様は、公平な神様です。
人の作りだした物に囲まれた世界では、私たち勝手に不公平を感じて生きていますが、神様は、その不公平な世界をも終わらせて、天のすべての霊的祝福を余すところなくお与えになり、その保証として、聖霊なる神様まで私たちの内にお与えくださいました。

だから、私たちに出来ることは、ただただ、感謝と賛美だけです。
エペソ書 1：3 からずっと、ひたすらにパウロは、ほめたたえる、ほめたたえ
ると言います。
3つの祝福について言及するたびに、さっきもほめたたえと言ったのに、またその都度、ほめたたえと告白します。
人が定めた束縛の牢獄が、牢獄に見えず、神が与えたもうた祝福が祝福に思えて仕方がないことがよく分かります。

パウロだけではありません。
私たちもこの天上のすべての祝福を身に受け、身に受けたことを実感するならば、ただただ感謝と賛美しか出てきません。
主イエス様の十字架を深く考え、黙想し、瞑想しますと、状況が悪くても、大変でも、感謝と賛美へと導かれていきます。

そして、その感謝と賛美から、私たちの生活、暮らしにあらわれる神の栄光が見えてきます。
神の御手、守り、神の先を見据えた恵み・祝福が分かってきます。
何てことない日常にあらわれることが、奇跡に思えてきます。

また、実際に、荒野で海が割れ、天からマナが降ってくるような奇跡を体験しますね。
なぜなら、神への感謝と賛美は、私たちの表情を変え、行いを変え、姿勢を変えるからです。
与えられた祝福を深く瞑想するならば、感謝と賛美が現れ、それが私たちを変えます。

Conclusion

私たちの人生を神様は何でお造りになったんだろうか？
何で私たちをこの地に生まれさせたんだろうか？
何で私たちは生きているんだろうか？　と思うなら、今日の御言葉を見てく

ださい。

答えは一つです。

神の栄光をほめたたえるため、イエス・キリストを賛美するために、神様は私たちをお造りになりました。

神の祝福を味わい体験した使徒パウロは、人間の人生を考えた時、そこに行き着くことを持っているものすべてをもって、告白します。

神様は、私たちを感謝と賛美へとお導きになります。

また、「イエス様お一人で人生満足！ それで十分！」だということへと導いて行かれます。

それこそ、神様の私たちに対する御心です。

この神様の与えたもうた祝福にどっぷりつかって、生きていきましょう。

お祈りいたします。

祝福：エペソ人への手紙 1：12